

---

# 王と精霊

山田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王と精霊

### 【Nコード】

N3361U

### 【作者名】

山田

### 【あらすじ】

風の国、サンセベリア。

前王が早くになくなったため、一人息子であるフォルカ王子が若くして、王座についた。だが、彼は王族なら誰でも持っているものを所有していなかった。

生まれた事に喜びを、皆に祝福を。

ああ、この国はなんて美しいのだろう。

私の国、サンセベリア。

\*\*\*\*\*

一人の騎士が豪華な椅子に座る青年に声をかける。

「準備が整ったようです。覚悟はよろしいでしょうか。」

椅子に座った男は笑う。

「もう疲れた。僕はいつでも覚悟していたよ。この時が来ることを。」

「  
窓の外を見る。

晴れた青空。窓を開け放しているため、時折ふわりと風が入ってくる。

男はその風を受け、気持ちよさそうに目を閉じた。

細めた目の色は緑、風に揺れる絹のような髪の色は淡い金色。

整った顔の青年だが、顔色が悪く、放って置いたら消えてなくなってしまうような様子だった。

風の国、サンセベリア。

前王が早くになくなったため、一人息子であるフォルカ王子が若くして、王座についた。

だが、彼は王族なら誰でも持っているものを所有していなかった。その事実をサンセベリア国の民は子供から大人まで皆知っている。

\*\*\*\*\*

一人の旅人がとある店に入る。

旅人はフードで顔を覆っているため、男か女か分からない。細身ですらりとした人物であることは分かる。

「いらつしやいませ。」

少しぼつちやりした店の女主人が愛想よく旅人を迎えた。

「よかった。ここは開いていたのか。」

フードをとりながら、店の果物を物色する。

この旅人は背がすらりと高い女性だった。

髪は埃で少し汚れているが緑色の長い髪、瞳の色も深い緑色だった。

店主は顔を少しゆがませて。

「うちだつて閉めたいよ。でも、全部が全部閉めちまったら、困る人が出るからね。」

旅人は首をかしげる。

「なんだ？祭りでもあるのか？」

「まあ。旅人さんには関係ないかもしれませんがね。国に対してストライキつてやつですよ。」

町の店はほぼすべてCLOSEとなっていた。

「この国は平和でそこそ豊かな国だと思うが。なにか不満でも？」  
「どうせすぐ耳に入るから言うけど、王が処刑されるらしいんだ。」

旅人は驚く。

「なぜ？こんな立派な国なのに。」

店主は苦笑する。すると奥のほうから声が聞こえてきた。

「だろ？なのに貴族のやつらが王の欠点をあげて、それを理由に国をのつとろうとしてるんだ。」

奥から出てきた男は視線を厳しくして通路に目を向ける。

「やつら騎士の連中もそれに賛同したらしい。」

馬に乗った騎士が警備のため周囲を見回りながら進んでいる。

「やつらは金に屈したんだ。この弱虫どもめ！」

男が果物を騎士に向かって投げつけたが、旅人がすばやい動作でその果物をつけ止める。

男と女主人はそのすばやい動作に目を見張った。

「こんなことしても、何にもならない。最悪、牢屋行きだ。」

男は苦いものを噛み潰した顔をして、奥へ戻っていく。

「あんた凄いいねえ。ああ、そうだ。有難うよ。」

危うく捕まるところだった。

ほら、これお礼。」

果物を数個、手渡してくれた。

その後、旅人は宿を探したがどこもかしこも閉まっっていて、泊まれそうにない。

野宿でもいいかとあきらめかけた時。

女の人が蹲っているのが目に付いた。

「大丈夫ですか。」

声をかけると女性は教会の者だったらしく、祈る姿勢で礼を述べられた。

「ええ。ちよつと眩暈がしてただけで。朝から広場で大きな声で抗議してたからかしら。疲れが出ちゃったのね。」

立とうとしたが、よろめいてしまう。

旅人は女性をささえ、抱きかかえる。

いわゆる、お姫様抱っこというものだ。

「送りましょう。」

女性はびっくりして。

「あなた。本当に女の方？すごい力持ちなのね。」

旅人は苦笑して。

「旅をしていると自然とそうなります。」

だけど、しばらく町を離れすぎたようだ。

ここまで、やっかいなことになっているとは。」  
抱きかかえられた女性はその言葉に涙を浮かべて数回頷く。

女性を教会に送ると、神父にたいそう感謝された。

「お礼にご飯でも食べていきませんか？」

自分のお腹が減っていることにその言葉で気づき、旅人は苦笑し、その申し出をありがたく受けた。

どうぞ。と出されたものは質素なスープとパンのみだったが、十分だ。

「ありがとうございます。」

スープに口をつける。

「旅人さん、どこかに泊まる場所は？」

「いえ。」

「でしょうな。どこも締め切っていますから。」

旅人は肩をすくめる。

「森で野宿をしようと思っている。」

神父は苦笑する。

「若い女性が、野宿なんてするものではありません。今日はここに泊まってはどうでしょうか？」

「いいのですか？」

「もちろん。私たち風の国サンセベリアは旅人を疎かにする事は良しとしておりませんから。」

夜になり、教会の片隅で寝る準備を整えていると、昼間に倒れていた女性が近寄ってきた。

「今、お話しても良いでしょうか。」

「ええ。体調は大丈夫？」

女性は赤らんだ頬を押さえる。

「運んでいただき、ありがとうございます。体力がないのに無理をするものではないと分かつてはいるのですが。」

女性はこぶしを握って力説する。

「今、立ち上がらないと、何かしないと。絶対後悔しますもの！」

「それで、城に向けて広場で抗議を？」

「ええ。貴族たちは王の欠点をあげて。王はこの国を守るに値しないと言っているそうですが。」

私はそうは思いません。」

「私もそう思う。この国をずっと旅しているが、王は良くやっているとと思う。」

・・・気になっていたんだが、欠点とは？」

女性はきよきよと周りを見渡す。

「王は精霊がおりません。精霊から貰う、守護の紋章が体に刻まれていないのがその証拠。」

旅人は目を見張る。

「守護の紋章がない・・・。」

「ええ。王族は生まれたときに自分の精霊も生まれ。」

その精霊から守護の紋章を貰い。守護の紋章の力で魔法を操り、精霊とともに国を守ることが出来る。」

女性はため息をつく。

「でも、国に攻めてきた魔物からちゃんと国民を守っているし、生活だってそこそこ豊かなのよ。なのに王を処刑しようだなんて・・・！」

「それで、広場で抗議を？」

「ええ。捕まってもいいと思ってるわ。」

「マリア。」

神父が女性を呼びにきたようだ。

「あら、少し話すぎたみたい。旅人さん。いい夢を。おやすみなさい。」

「おやすみ。」

神父も挨拶をしてきたので、それに返事をする。  
どうやら二人はこれからどこかへ出かけるようだ。

去り際の二人の顔を見ると、何かを決意したような真剣なまなざしをしていた。

何か重大なことが起こる前触れのように。

このまま寝るわけには行かず、簡単な身支度を整えると、二人の後を追う。

夜の闇は濃く、明かりも無い町であれば、直ぐ目の前も見えぬほどだったが

今は月明かりがあるため、二人を追うのは簡単だった。

どこか遠くまで行く訳ではない事は分かっていたが、ほんの10分ほど歩いた所で二人の歩みはとまる。

二人は回りも気にせず、一つの家の裏戸を叩く。

すると、中から一人の男が顔を出し、二人を戸の中に引き入れた。

神父が戸を閉めるときに、旅人はそれをとめる。

「これから何か、騒ぎでも起こそうと？」

神父はびっくりする。

扉のすぐ傍にいた男は旅人を見て直ぐに気づく。

「あんたは昼間の。」

戸の内側にいる仲間と思われる男たちは急なことで、びっくりして直ぐに口を開くことが出来ない様子だ。

旅人は構わずに言う。

「私も手伝わせてくれ。」

固まっていた戸の中にいた者達が訝しげにざわめきだす。  
すると、驚きから目が覚めたマリアが口を挟む。

「この方はいい人だから。大丈夫よ。それに力も強いの。」



昼間、騎士に向かって果物を投げた男はうなずく。

「知ってる。ここじゃ話せない。入りな。」

家の中には20人ほどの男が集まっていた。

到底戦えそうに無いものたちであったが、みな武装している。

「これから牢屋に侵入して、王様を助ける。」

「騎士がいるだろう?」

「だから、町で力の強い連中を集めたのさ。」

果物屋のおかみがいう。

確かに、力仕事は出来そうだが、騎士相手となると難しいだろう。

扉から出て、数分もしないうちに巡回の騎士と出くわす。

「なんだ。お前ら。夜にこんな人数で出歩いて。さっさと家に帰るんだ。」

見回り兵が5人。

町の男達は無言で、腰に下げた剣を抜く。

騎士達と町の男達に緊張が走る。

「・・・全員捕縛する。」

騎士達はすばやく剣を抜き、こちらに鋭い視線をよこす。

一人も逃がさぬように周りを取り込まれる。

町の男の一人が声を上げながら、騎士に切りかかるが、たやすく避けられる。

後に続く男たちもそうだ、誰一人として騎士と刃をかわすこともできない。

旅人が予想していたように、やはり普段から訓練されている騎士に町の男達はかなわなかった。

騎士は余裕だが、男たちは剣を振り回し汗だく、中には振りなれない剣を取り落とすものもいた。

旅人は一つ息を吐くと、参戦しようと剣を抜きつつ一步を踏み出す。他の男たちとは比べて、剣の抜き方構え方からして只者ではないと悟った騎士たちは

フードをかぶった旅人を囲む。

一人の騎士が、様子見で剣を横に振るうと一瞬の間に旅人が姿を消した。

消えたと思われた旅人は上空に飛び上がっていて、空中でくるりと一回転すると、一人の騎士の後ろへ着地する。

常人ではありえないぐらいの身の軽さ、着地する音さえもほぼ聞こえない。

背後を取られた騎士は旅人がどこへ消えたのか見えておらず、仲間の騎士を見渡すがこちらを唖然として見るだけで、何の反応もない。旅人は騎士の首元を、握っている剣の柄で殴り、あっけなく気絶させる。

騎士達が動きを止めている内に、2人目へ飛び掛る。

狙われた騎士はあわてながらも、旅人が繰り出してきた剣先を、少し震える手で持つ剣で2・3度受け止める。

その覚束ない手元に旅人は素早く回し蹴りを入れる事で騎士の剣を遠くへ飛ばす。

飛んでいった剣の行く先を目で追っていた騎士は旅人に殴られたのに気づかないまま意識がなくなっていた。

3人目が旅人へ切りかかったが、旅人は一瞬の間に懐へ入り、片手で襟元を掴み、引き寄せ、騎士を地面へ叩き付けた。起き上がる前に首元へ剣を当て、動きを止めさせる。

さて、次はと旅人が顔を上げる、その瞬間。

鈍い音とうめき声が聞こえたので、そちらをみると、完全に旅人へ意識を向けていた騎士たちに

町の男たちは後ろから物をぶついたり覆いかぶさったりしていて、動きを封じ込めていた。

騎士達を縛り、柱にくくりつけた後、旅人は苦笑する。

「皆やればできるじゃないか。」

無計画な男たちを見渡す。

「しかし。よく、牢屋まで行けると考えたな。」

「なりふりかまっちゃいられないんだよ。さあ、行こう。」

「旅人さんがいてくれてよかった。」

旅人は一つため息をついた。

男達に案内された道順で目的地である牢塔に無事つくことが出来たのだが。

・・・はつきり言って、ほぼ正面突破。

要所要所で出くわす騎士達をありえないほど早い動きで対処する旅人。

本当にこの道でいいのかと何度も確認するが、これでいいのと言う男達に旅人はあきれるしかない。

牢塔の内部にいた騎士もあっさり旅人が倒し気絶させる。

ここまでくる道のりで、旅人の戦う様を見た町の男達は、倒せて当然といわんばかりの様子。

旅人は少し釈然としない面持ちだったが、目的の牢屋についた為、意識を切り替える。

他より豪華な牢に王が中央で椅子に座っており、こちらを驚いた顔で見ている。

町の男達は我先にと王と自分達を隔てている鉄格子にすがり付く。

「王様。助けに来ました。」

「さあ、逃げましょう。」

「鍵はどこだ。探せ！」

王は気を取り直すと立ち上がる。

「開ける必要はない。助かったところで、私には行く所も何もないのだから。」

旅人が一歩前に出て

「私とともに旅に出よう。」

王は驚き旅人を凝視する。

他の者も賛同する。

「そうだ。そうするのがいい。」

王は皆を見渡し微笑む。

「ありがとう。だが、私は国を引き継ぐために殺されなければいけないと思っている。」

王が生きているのに、次のものに国民は誰も目を向けはしないだろう。」

王の言葉に皆が騒ぎ出す。

「あたりまえです!」

「王様以外に誰が王様になるんですか。」

「誰もいませんよ!」

「ありがたいが、それではいけない。国が滅びてしまう。」

王の真剣さに騒いでいた全員が口を閉じる。

「さあ、皆家にもどれ。騎士が見回りに来てしまう前に。」

「王様。」

尚も諦め切れない者が口を出そうとすると、王は笑顔でさえぎる。

「ありがとう。嬉しかった。」

複数の騎士の歩く音が聞こえ、皆あわてて来た道を引き返す。ひとりの旅人を残して。

「今回の首謀者は誰だ。」

「聞いてどうする。」

「会ってくる。」

王は笑う。

「会えるか？宰相だぞ?」

旅人に視線を向けると、そこには誰もいなかった。

王の部屋にたたずむ男一人。

顔は疲れきっている。

「胃が痛いな。」

「王を処刑するという罪からか？」

男は驚いたように振り向く。

「誰だ。」

女はマントをはずし。不適に微笑む。

「私の名はサンセベリア。あなたが宰相？」

宰相は驚きかたまる。

女はもう一度聞く。

「一番豪勢な部屋にあなたがいるからそうかと思った。宰相ではないのなら、居場所を聞きたい。」

「・・・私が、そうだ。私を殺しに、きたのか？」

女が腰に下げている剣を見る。

女はため息をつく。

「王がここにはいられないと言う、それなら一緒に旅に出ようかと思いついてみた。」

が、断られてしまった。

無理やり連れて行っても追っ手がきそうだし。王の言うことも一理ある。

なら、あなたをどけて、王を戻そうと思う。」

淡々と言う女に宰相は冷や汗をかきつつ答える。

「王には守護の紋章がありません。今回のことはまた起こる可能性があります。ありませんか？」

あなたが守護を与えないからこうなった！」

女性は何だかのように笑う。

宰相は焦りながらも、女を責めるように、指刺しながら強く言う。

「サンセベリア。それは国の名であり、この国の王族につく精霊の名でもある。」

女性、サンセベリアは苦い顔をする。

「守護の紋章は・・・つけ忘れていただけだ。」

「は？」

「うつかりしていた。悪いと思っっている。気付いて引き返そうと思っただが、城に留められそうで。

でも、あなたがこんな行為を起こさなければ特に必要はないように思えたが。」

まずいと思っっているのか、下を向きつつ相手を攻める。

それを聞いた宰相は、何かつき物が取れたかのように長いため息をつき、予想外のことを言ってきた。

「・・・分かりました。そういうことなら私は身を引きます。ただし条件があります。」

「え。」

「国民の目の前で王に紋章を与えてください。それが条件です。」

雲ひとつない青空。

広場には浮かない顔の人ばかり。

処刑日当日。

ざわめきの中、王が台へ上る。

すると一層、騒ぎが増したが、一つ大きな風が吹く。

良く通る宰相の声が聞こえた。

「上を。」

王が顔を上げると、緑の髪、緑の瞳を持った一人の女性が目の前にふわりと降り立った。

女性は王の頬に両手を当て、ゆっくりと額に一つキスをする。

すると王と女性は一瞬、強い光に包まれ。

女性が目を開けて王の額を見ると守護の紋章が刻まれていた。

国民は喜び歓声を上げる。

王は目を見張り。

悲しそうな顔をして、女性の腕をつかむ。

「なぜ今頃・・・!!」

「ごめん。あなたと私が生まれたとき、国全体に知らせようと、祝福の風を起こして飛び回った。

生まれたことと、自由が嬉しくて嬉しくて。

そのまま風のように旅をしていた。」

王は精霊を抱きしめる。

精霊も王を抱き締めかえして続けて言う。

「でも、戦いときは影ながら手助けしてたし。あなたの力だけでもこの国は大丈夫だった。」

宰相は王と精霊の様子を見ながら事のはじまりの場面を思い出す。

\*\*\*\*\*

王が真剣な顔で宰相へ命令を出す。

「王を処刑することになったと噂を広める。」

「は？」

「そうすれば、精霊も出てくる。」

「え。」

「もう、待つのはやめた。風のように動き回るやつを捕まえるには僕が囷になるしかないだろう。」

窓から入ってくる風を受けながら王は目を細める。

宰相は恐る恐る王へ尋ねる。

「もし、・・・本当にいなければ？」

「魔物と戦っているとき、幾度も風が助けてくれた。絶対に僕には精霊がいる。」

自信にあふれた顔でにやりと笑うが、「でも」と言葉を続け下を向く。

「本当にいないときは、そのまま僕を処刑すればいい。」

宰相は飛び上がりばかりに驚いた。焦って王を説得する。

「そこまでする必要がどこに？戦いに手を貸してくれるのなら、あなたの力だけでも此の国はやっていけると思うのですが。」

\*\*\*\*\*

宰相と同じように事の始まりの日を思い出した王は、精霊をもう一度強く抱きしめ直して、言う。

「国にじゃない。僕に必要なんだ。」

「・・・ごめん。今度から旅の合間にはよろよ。」

「鎖を！」

騎士が鎖を精霊の足にはめる。

王は極上の笑みを浮かべ、腕の中の精霊に笑いかける。

「さあ。旅は終わりだ。風の精霊でもあるが、お前は僕の精霊ということを忘れているらしい。」

今日から離れることは許さない。」

「わ、私を嵌めたな・・・！！首謀者はお前か。」

「ようやくわかったか。」

にやりと笑う王。

喜ぶ国民。

怒る精霊。

これは、王と精霊に振り回される、平和でまあまあ豊かで少し騒がしい国、サンセベリア国での有名なお話の始まりの一つ。

残りのお話はまたいつか。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3361u/>

---

王と精霊

2011年6月27日16時17分発行